

★紹介コーナー No. 8



「和・話・倭・輪・わっ」—金沢区生涯学習“わ”の会

金沢区(かなざわく)は今年、区制 70 年ということで、金沢区役所には大きな横断幕が掲げられている。「800 年中、70 年が『金沢区』と書かれている。何を言いたいのか?と考えると、金沢は古くから交通の要所として、また鎌倉への海上輸送の荷揚げ場として栄えてきたというから、「金沢区としては(たったの)70 年だけれど、800 年もの(長い)歴史があるんですよ」と言っているように聞こえてきた。

金沢区生涯学習“わ”の会のマークは、和・話・倭・輪・わっ、の“わ”尽くしの楽しいネーミングが形になっている。会は、各地区での生涯学習設立機運と時を同じくして、20 年前の 1998 年に、「地元『金沢の歴史』を学ぶことを軸として、豊かな生きがい作りを進める」という趣旨で始まった。当初は会員が 60 名くらいであったが、現在の会員数は 122 名と拡大している。7 代目の代表を務められている内田孝知さん、副代表でホームページ担当の江口正彦さん、会報「かねざわ」編集長の山腰策次郎さんにお話を伺った。(取材・文 渡辺登志子)

“わ”とは、

- ◆ 平和・和気あいあいの“和”
- ◆ お話・会話・対話の“話”
- ◆ 古い時代、日本国の呼称であった“倭”
- ◆ 人間と人間を繋ぐ“輪”
- ◆ 感動詞の“わっ!”

金沢(かねざわ)の歴史に裏打ちされた会の伝統と誇り

まず、ご紹介いただいたのは最近発刊された「かねざわの歴史事典」第 3 版、1300 円+税。初版(平成 19 年)、新版(平成 22 年、10 周年記念)と発刊され、このたび 20 周年を記念して第 3 版が出された。4 年の編集作業を費やし、総項目数 1583 で、追加(79)、改訂・修正(608)と、4 割以上に手が加えられた。「この書は横浜市金沢地域の遺跡、名所、旧跡、地名、社寺、企業、事象、伝承や関連する人物、書籍などを網羅した歴史事典です。」と説明書きがある。今回から対象を金沢区のみならず、周辺の鎌倉や磯子区杉田など近郊にまで広げた。編集委員の方たちで、実際に現地調査をしたうえで、また、難しい用語はかみ砕いて記載したということもあり渾身の出来栄えのようだ。

歴史事典や会報の名称が、なぜ「かねざわ」とつけられたかは、当地の古名を「かねさわ」といったという伝承がある、当地に縁の深い金沢北条氏は「かねざわほうじょうし」と称した、ということからのようである。昔は濁点をつけなかったのが、「かねさわ」とあっても「かねざわ」と言っていたと思われる。

国宝の話: 横浜市民でも、横浜に国宝があり、それが何で、どこにあるかを知る人は少ないと思う。それが、右の3つで、いずれも金沢文庫と称名寺のものである。金沢文庫は東の正倉院と言われている。所蔵している膨大な量の古文書も、まだ全部調べられていないそうだ。文選集注(もんぜんしゅちゅう、右欄を参照)は本家の中国には原典も写しも残っていないとのことで、中国や韓国の学者が金沢文庫に研究に来ているという。金沢区民なら、これを誇らずにはいられないだろう。これら国宝にまつわる用語なども、是非「かねざわの歴史事典」で調べてみたらどうだろう。



横浜市の国宝は金沢文庫と称名寺に

- 文選集注19巻(1955 年指定)
- 北条氏の 4 人の当主の肖像画(実時、顕時、貞時、貞将)(1966 年指定)
- 「称名寺聖教」と「金沢文庫文書」(2016 年指定)

かねざわの歴史事典より

【文選集注】もんぜんしっちゅう

中国で編まれた『文選』の注釈集成、当初120巻・編者不明(国宝、県立金沢文庫保管)。本書は中国では既に失われ日本にのみ伝わり、「李善注」(語句、事実の考証中心)、「五臣注」(解釈中心)のほか他に見られぬ注が引用される。称名寺では平安時代の写本19巻を所蔵するも他は散逸。諸葛孔明「出帥表(すいしのひょう)」、夏侯孝若「東方朔画賛」などを含む。明治43年(1910)『紙本墨書文選李善注』と誤認され国宝指定。戦後の文化財保護法で重要文化財に格下げとなったが、昭和30年(1955)『文選集注』と改め(新)国宝。

【紙背文書】しはいもんじょ

古文書学用語、「裏文書」ともいう。和紙が貴重であった古代・中世には、反故になった書状や訴状などに使われた良質な和紙の裏に仏典など聖教を書写した。この紙背に残った元の文書を「紙背文書」という。称名寺では金沢貞顕書状などの不要となった文書などの裏を使って、膨大な量の典籍など聖教が書き残された。未使用裏紙面を再利用し聖教類を書写する場合、先ず両端を揃えるための切断、数伸ばしのための霧吹き、木棒で叩くなどの作業を行うため、紙背文書は分断、断片化されやすい。そのためその復元、解読するには、極めて困難で長時間を要する複雑な作業を伴う。「称名寺聖教」とその紙背文書を含む「金沢文庫文書」が一括国宝指定となったのは、この表裏一体が一つの理由でもある。[→金沢文庫文書][→称名寺聖教]

“わ”の会の2つの柱—学習会と分科会



2017年7月22日の学習会「室町時代Ⅱ-永享の乱-」講師の呉座勇一氏が足利持氏が足利将軍家に似た花押に変更したとの説明をされている。呉座氏は『応仁の乱』中公新書 40万部を超えるベストセラーの著者

る。これまでの経験を活かし、講座の内容、講師の選定・交渉など敏速に行うことで、これから注目される珠玉の講師を呼び寄せているのが自慢のようだ。学習会は会員が全員参加するのが前提であることから、今のところ100名以上収容できる会場が用意できないので、残念ながら現在の会員数以上は増やせないそうだ。

分科会は、“わ”の会に特徴的なもので、「寺社を巡る会」、「古文書を読む会」、「ふれあいの道歩こう会」、「懐かしの映画を観る会」、「浮雲俳句会」、「パソコンを使いこなす会」、と6つの分科会があり、近々7つ目ができ

長い歴史を持ち、横浜市では貴重な史料がどこよりもある金沢区では歴史関係のサークルがいくつもあり、それぞれ活発に活動されているようだ。なかでも“わ”の会は、規模が大きく、生涯教育のリストのなかで常にトップに位置付けられている。この“わ”の会の柱となっているのが、学習会と分科会なのだという。

学習会は、「金沢の歴史を学ぶ」をテーマに、古代から現代までの全時代が対象で、いろいろな視点から見られるように企画されている。一年間に学習会が7回に加えて、一般の人も参加できる公開講座があ

るそうだ。分科会は、言うなれば、一つ一つが立派な生涯学習サークルといえる。各分科会に、それぞれ代表がいるし、会費の額も活動により異なる。それでも、これは“わ”の会の分科会なのである。幹部の皆さんは口々に「学習会では、会員同士の交流はあまりできませんが、分科会に入ることによって仲間ができて話がはずむ」「自分にあったものを見つけて活動することで生きがいを見出せます」「終わった後で、うまいビールが飲めるのですよ」と語った。だから必ず分科会に入ること勧めている。どの分科会も10年以上続いているし、会員の約6割が2つ以上の分科会に参加しているそうだ。内田代表も語らいつ飲み仲間を探して入会したとのことで、皆さん、実に楽しそうだ。

すべてが網羅されている会報とWeb サイト

これら会の全体をまとめ上げているのが、会報とWeb サイト(ホームページ)の存在だ。会報「かねざわ」には、会の方針・運営、学習会・各分科会の方針や活動などが、かなり詳しく報告されている。サイトはその内容を、忠実に反映し、データとして残すことで会の歴史を積み上げているが、会報と違うのは個人名がほとんど見当たらないこと。これはネット上での個人情報の取り扱いに配慮しているからかと思う。外部の人間でもこのサイトをみれば、この会の活動のことがよくわかり、そのすばらしさが感じられると思う。

最適な生涯学習の場を提供

現在の会員の平均年齢は75歳くらい。出来れば若い人たちに入ってもらいたいが、定年が延びているから、平均年齢は下がりそうもない。会員が個々に輝きながらも、個人があまり見えず、全体の和・輪が全面で出ているのが、“わ”の会の特徴のように見える。それが非常に日本的であり、高齢者には快適な生涯学習の場になっているらしい。“わ”の会の年会費は3000円で、他の生涯学習と同じくらいであるが、こちらは、あまりあるお得感があると思う。会員には「かねざわの歴史事典」が無料で提供されるし、著名な講師陣を誇る学習会も無料で参加できる。これらの実現は、各人が自分の能力を遺憾なく発揮し、全体的な効率性にも配慮している結果のようだ。“わ”の会は“生涯学習の鏡”と言ったら、褒めすぎだろうか。

“わ”の会ホームページ

<http://kanazawa-wanokai.in.coocan.jp/>